

## イエシュアによる律法の解釈 (5)

【聖書箇所】 マタイの福音書 5章 43~48節

### ベレーシート

●今回は、イエシュアの律法解釈の第六(=最後)のタブレットです。特に、最後にある「だから、あなたがたは、天の父が完全のように、完全でありなさい。」(5:48)という教えは、第六のタブレットの結論であるだけでなく、これまでのすべてのタブレットを総括する言葉でもあります。



【新改訳改訂第3版】 マタイの福音書 5章 43~44節

43 『自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め』と言われたのを、あなたがたは聞いています。

44 しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。

●モーセの律法に、「**自分の隣人を愛せよ**」との教えがあります。それはレビ記 19章 18節後半です。

【新改訳改訂3】 レビ記 19章 18節

あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい。わたしは【主】である。

●この部分をヘブル語原文で見ると、以下のようになります。

アドナイ	アニー	カーモーハー	レレーアハー	アーハヴター
יהוה	אני	כמוך	לרעך	אהבת
主	わたしは	あなた自身のように	あなたの隣人に対して	あなたは愛しなさい

●新改訳では「あなたの隣人を」と訳しています。本来ならば「を」の部分は目的格の前置詞「エツト」(את)とすべきところを、ここでは前置詞の「レ」(ל)が使われています。「レ」(ל)は「～に向かって、～に対して、～に関して」という意味です。つまりその前置詞によって、隣人に対するより積極的なかわりを示唆しているように思われます。ただし、ここでの隣人(「レーア」לרעך)とは、同じ神への信仰を持つ共同体の仲間に限定されます。つまり自分の仲間を愛し合うようにとの教えです。このように、ユダヤ人にとって愛の対象は基本的に選びの民に限定されていたのです。

●そうした教えに付け加えるようにして、パリサイ人や律法学者たちは、「自分の敵を憎め」とも教えたのです。神の律法には、「自分の敵を憎め」という教えはありません。ユダヤ人たちは、バビロン捕囚以降、異邦人(バビロン、メディア・ペルシア、ギリシア、そしてローマ)の支配の下に置かれ、長い間、辱めを受けてきました。それゆえパリサイ人や律法学者たちは、異邦人や神に敵対する者たちを自分の敵と見なし、その人々を憎めと教えていたのです。その教えを支えるひとつの例が、詩篇 139 篇 21~22 節にあ

ります。

【新改訳改訂第3版】詩篇 139 篇 21～22 節

21 【主】よ。私は、あなたを憎む者たちを憎まないでしょうか。

私は、あなたに立ち向かう者を忌みきらわないでしょうか。

22 私は憎しみの限りを尽くして彼らを憎みます。彼らは私の敵となりました。

## 1. イエシュアの対立命題

●ところがイエシュアは、『自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め』という口伝律法(言い伝え)に対して、「自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。」と語られたのです。イエシュアのことばには「自分の隣人を愛し」という部分がありますが、当然の前提として語っています。そして後半の「自分の敵を憎め」という部分に対して、「自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。」としたのです。この表現は同義的パラレリズムです。つまり、「自分の敵を愛する」ことは、「(自分を)迫害する者のために祈る」ことでもあるのです。

●ところで、ここで言われている「敵」とは、「自分から見て敵」というのではなく、「自分のことを敵と見る人々」のことです。つまり、あなたの存在を憎んでいる者、あなたのことを侮辱する者、あなたをのろい、迫害する者たちのことです。「敵を愛する」ことと、「敵を好きになる」こととは違います。私たちに、主はすべての人を好きになれと要求しているわけではありません。たとえ、好きではなくても、その人を愛し、その人のために祈ることはできるということです。愛は、私たちの感情をはるかに越えたことです。ある律法の専門家がイエシュアに「私の隣人とは、だれのことか」と問いました。するとイエシュアは「サマリヤ人のたとえ話」(ルカ 10:30～36)をされました。

【新改訳改訂第3版】ルカの福音書 10 章 30～36 節

30 「ある人が、エルサレムからエリコへ下る道で、強盗に襲われた。強盗どもは、その人の着物をはぎ取り、なぐりつけ、半殺しにして逃げて行った。

31 たまたま、祭司がひとり、その道を下って来たが、彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。

32 同じようにレビ人も、その場所に来て彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。

33 ところが、あるサマリヤ人が、旅の途中、そこに来合わせ、彼を見てかわいそうに思い、

34 近寄って傷にオリーブ油とぶどう酒を注いで、ほうたいをし、自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行き、介抱してやった。

35 次の日、彼はデナリ二つを取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『介抱してあげてください。もっと費用がかかったら、私が帰りに払います。』

36 この三人の中でだれが、強盗に襲われた者の隣人になったと思いますか。」

●イエシュアの最後の質問の答えは、「サマリヤ人」です。このたとえ話に出てくる「祭司」と「レビ人」はユダヤ人です。ユダヤ人は伝統的にサマリヤ人を毛嫌いし、憎んでいました。両者は敵対関係にありました。しかし、このサマリヤ人のしたことが隣人を愛することであり、敵を愛することだとイエシュアは教えたのです。「私の隣人とはだれのことか」、それはだれであっても、目の前に助けを必要としている人、困っている人が隣人なのです。倒れている人がユダヤ人であろうと、サマリヤ人であろうと、たとえ自分を敵と思っている人であったとしても、彼を助けること、これが隣人を愛することだとイエシュアは語られました。またイエシュアは隣人を愛することを語られただけでなく、そのとおりのことをイエシュアは実行されました。指導者たちから扇動されて「十字架につけろ!」と叫んだ人々のために、イエシュアは十字架の上で何と語られたのでしょうか。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです。」(ルカ 23:34)。これが敵を愛し、迫害する者のために祈ることなのです。

●主にある私たちは、果たして「敵を愛し、迫害する者のために祈ることができる」のでしょうか。答えは「然り!!」です。なぜなら、御子のうちにあった聖霊が信じる私たちにもあって、その聖霊が言いようもない深いうめきによって私たちのためにとりなして下さるからです(ローマ 8:26)。しかも、その働きは究極は、私たちを御子のかたちと同じ姿に変えることです。そのことを聖霊が成してくださるのです。

## 2. 『自分の敵を愛し、迫害する者のために祈った』模範者

### (1) ダビデ

●こんな経験をした人物の中に、旧約ではダビデがいます。ダビデにとっての敵、つまり、ダビデに対して殺意をもって執拗に追跡し続けたサウル。サウルはもともとダビデの敵ではありませんでしたが、ダビデの功績を妬んだことで、ダビデの敵となってしまったのです。殺意を抱いて執拗に追うサウルに対して、ダビデは決して戦うことをせず、彼を王として油を注いだ主にゆだねました。ある意味において、サウルの存在はダビデにとって自分を王としてふさわしく整えてくれた「愛すべき存在」とも言えるのです。サウルの死に際してダビデは哀歌を作ったほどです。この哀歌は「弓の歌」(Ⅱサムエル 1:19~27)として知られていますが、ダビデはサウルがイスラエルの王として、イスラエルの周囲のすべての敵と戦って彼らを懲らしめた王としてたたえています。最後はイスラエルの宿敵ペリシテ人によって殺されますが、「愛される、りっぱな人」(Ⅱサムエル 1:23)としてダビデはサウルを追悼しています。

### (2) 「ダビデの子」イエシュア

●「ダビデの子」イエシュアは、対立命題を生きられた神の御子です。それは十字架において現わされました。十字架での最初のイエシュアのことばはこうです。「父よ。彼らを赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」(ルカ 23:34)。

### (3) イエシュアの弟子「ステパノ」

●初代教会の最初の殉教者となったステパノもイエシュアと同じように、エルサレムの外に追い出され、自分に石を投げつける者たちのためにとりなして祈っているのを見ます。「主イエスよ。私の霊をお受けください。主よ。この罪を彼らに負わせないでください。」と。ステパノの殉教の種は多くの信者に影響を与え、福音が拡大していく力となったのです。

### (4) イエシュアのしもべ「パウロ」

●ステパノが殉教したとき、そこに青年サウロ(後のパウロ)がいたことをルカは記しています(使徒 7:58)。上からの光によって回心した使徒パウロも、「もしあなたの敵が飢えたなら、彼に食べさせなさい。渴いたら、飲ませなさい。」(ローマ 12:20)と述べていますこれも「敵を愛する」教えです。パウロは自分の同胞であるユダヤ人からなんども宣教の働きを妨害されるという嫌がらせを受けています。しかしそんなパウロが同胞のために次のように述べています。

【新改訳改訂第3版】ローマ人への手紙 9章 1～3節

- 1 私はキリストにあつて眞実を言い、偽りを言いません。次のことは、私の良心も、聖霊によつてあかししています。
- 2 私には大きな悲しみがあり、私の心には絶えず痛みがあります。
- 3 もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者となることさえ願っていたのです。

## 3. 天の父が完全なように、あなたがたも完全であれ

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書 5章 43～48節

- 43 『自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め』と言われたのを、あなたがたは聞いています。
- 44 しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。
- 45 それでごそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです。

天の父は、悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださるからです。

- 46 自分を愛してくれる者を愛したからといって、何の報いが受けられるでしょう。

取税人でも、同じことをしているではありませんか。

- 47 また、自分の兄弟にだけあいさつしたからといって、どれだけまさったことをしたのでしょうか。

異邦人でも同じことをするではありませんか。

- 48 だから、あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい。

### (1) 天の父の子どもは父のご性質を受け継いでいる

●45 節にある「**それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです。**」という意味を考えてみたいと思います。まず、「それでこそ」とはどういうことでしょうか。それは前節にある「自分の敵を愛し、迫害する者のために祈る」ことを通してですが、一見、それができて初めて父の子どもになれるかのように聞こえるかも知れません。しかしそのように理解してはなりません。なぜなら、人は何かの行いによって御国の民となる事は出来ないからです。むしろここでは、条件ではなく、結果を表わしています。つまり、「自分の敵を愛し、迫害する者のために祈る」ことができるのは、神の子とされたしるしなのです。それゆえ、御霊の助けによって、御子が父と同じ心と性質をもたれたように、神の子とされた私たちも父と同様の性質をもつことができるのです。

●天の父のご性質とは、すべての人間に対する恵みにおける「**公平の完全さ**」です。悪い人にも良い人にも、正しい人にも正しくない人にも、分け隔てなく、「太陽を上らせ、雨を降らせてくださる」という公平さです。だとすれば、自分を愛してくれる者だけを愛したり、自分の兄弟にだけあいさつしたりすることは、取税人でも、異邦人でも同じことをしており、それは何もすぐれたことをしているわけではないとイエシュアは語っています。むしろ自分の枠を越えて愛を注ぐことが、天の父の子としてふさわしいことなのだと言っています。これが「**完全でありなさい**」という命令の意味するところだと考えます。つまり、すべてを覆う(overall)ような、すべてを包み込む(all-including)ような、天の父の心と同じ愛の広さが求められているのです。当時のユダヤ人たちにとってこの教えは、きわめて衝撃的な教えであったと思われます。

## (2) 「完全であれ」というさらなる意味の課題

●「**完全でありなさい**」(48 節)という命令は、枠を越えて隣人を愛することだけではありません。「完全な」と訳されたことばは、ギリシア語の「**テレイオス**」(τέλειος)の単数形です。複数形は「**テレイオイ**」(τέλειοι)。ヘブル語では「**シャーレーム**」(שָׁלֵם)です。おそらく、イエシュアはここで「**あなたがたは完全な者でありなさい**」(「ヘユー・シェレーミーム **הֵיוּ שְׁלֵמִים**」)と言われたと考えます。「**シャーレーム**」(שָׁלֵם)の類義語である「**ターム**」(תָּם)は、どちらかと言えば、「品性の汚れなき、傷なき完全さ」「**神への完全なる信頼ゆえの全き人**」を意味しますが、「**シャーレーム**」(שָׁלֵם)の場合は「**神のご計画とみこころ、御旨と目的を知る知的完全さ**」を意味すると考えられます。

●「**シャーレーム**」(שָׁלֵם)は、初歩的な乳飲み子のような者ではなく、堅い食物を食べることによって、「十分に成長した」「**成熟した**」「**円熟した**」「**大人の**」「**成人した**」者という意味でもあります。「**完全な者となる**」「**成人となる**」ということは、神のご計画とみこころを十分に知ること、神が備えて下さった救いの究極の目的にいつも心を向けながら、ひたむきにそれを待ち望み、追求しようと、一心に前のものに向かって進む(走る)ことを意味します(ピリピ 3:12~14)。その究極の目的とは「**御子の似姿に変えられること**」です。

●「**公平さの完全**」(overall, all-including)によって、「自分の敵を愛し、迫害する者のために祈る」ことができるためには、神のご計画とみこころに対する成熟さが求められます。それゆえ、このことを知

ることが不可欠なのです。ここにも「知恵と啓示の御霊」の助けが不可欠です。なせなら、使徒パウロが言うように、この「知恵と啓示の御霊」によって私たちは父である神を知るようになるからです。「父を知る」ことと「完全な者となる」ことは、密接な関係にあります。

### (3) 完全さを妨げるもの

●ところで最後に、父なる神を知って「完全な者となる」ことを妨げている原因の一つに「偶像」があります。イエシュアは求道する青年に対して、次のように言われました。

新改訳改訂第3版】マタイの福音書 19章 16～22節

16 すると、ひとりの人がイエスのもとに来て言った。「先生。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか。」

17 イエスは彼に言われた。「なぜ、良いことについて、わたしに尋ねるのですか。良い方は、ひとりだけです。もし、いのちに入りたいと思うなら、戒めを守りなさい。」

18 彼は「どの戒めですか」と言った。そこで、イエスは言われた。「殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽証をしてはならない。」

19 父と母を敬え。あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」

20 この青年はイエスに言った。「そのようなことはみな、守っております。何がまだ欠けているのでしょうか。」

21 イエスは彼に言われた。「もし、あなたが完全になりたい(※)なら、帰って、あなたの持ち物を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」

22 ところが、青年はこのことばを聞くと、悲しんで去って行った。この人は多くの財産を持っていたからである。

※「完全に」(「テレイオス」τέλειος、「シャーレーム」רָמַץ)

●イエシュアがここで問題としていることは何でしょうか。それは青年が気づかずに仕えている「偶像」です。ここには「偶像」ということばは出てきませんが、この青年の問題が明らかに「偶像」にあることを、イエシュアは彼に気づかせようとしています。人によって仕えている偶像は異なります。彼の場合は「多くの財産」でした。その偶像こそが、彼が「完全になる」ことを妨げているということをイエシュアは指摘したのです。案の定、彼は自分の偶像を捨て去ることはできませんでした。

●多くの場合、「偶像」それ自体は私たちの目には問題のないものに見えます。むしろ「良いもの」、神の祝福のしるしとさえ見えてしまうのです。そこに偶像の怖さがあります。偶像は目に見える形あるものもあれば、形のないものもあります。もし私たちが「完全である」ことを求めるならば、偶像、すなわち「偽りの神々に仕えること」に気をつけなければならないのです。この青年の場合には、多くの財産が彼の偶像であり、偽りの神々だったのです。かつての私の場合は「音楽」が偶像となっていました。音楽が偽りの神だったのです。イエシュアは言われました。「ふたりの主人に仕えることはできません」と。

●偶像の正体は、限りない価値をもって人を支配することです。ですから、偶像に支配されている人はそれがないと生きていけなくなるほどです。一見、それ自体は悪くは見えません。むしろ良いものに思えるのですが、それが神以上にその人の心を支配し、他にまさって優先されてしまうならば、それは間違いなく偶像と言えるのです。偶像によってイスラエルの国が滅びたことを考えるならば、どんなに偶像を警戒しても警戒しすぎることはありません。使徒ヨハネは、その手紙の最後に「子どもたちよ。偶像を警戒しなさい。」(Iヨハネ 5:21)ということばで結びました。この点においても、私たちは鋭い御霊のことばによる照らし(知識)が必要です。そうした意味において、イエシュアの「**あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい**」という命令を絶えず心の中に留め置き、その真意を反芻し続けたいと思います。

2017.7.9